

鳥取大学における推薦入学

鳥取大学入学者選抜方法研究委員会

昭和 54 年度大学入試に共通 1 次試験が導入されてより、入試制度について種々の問題点が指摘され、検討された結果として、昭和 62 年度より、国公立大学が A、B 2 グループに分かれて 2 次試験を実施することになったため、受験生にとっては、少なくとも 2 回の受験チャンスが与えられることとなった。このことは、受験生にとってメリットとなるか、デメリットとなるかは意見の分かれるところであろうが、一般的に考えて、一発勝負で決められるよりも 2 回チャンスがあった方が良いといえるだろう。

かくして長年、I 期校、II 期校に分かれて実施されてきた大学入試が、改善の名のもとに共通 1 次試験なる全国统一テストの導入によって一本化されたところ、種々の問題をはらんでいるということで、こんどは 2 次試験を 2 グループに分けて実施しようということになったわけである。この共通 1 次試験は、全国一斉に実施する必要がある試験の性質上、膨大な数にのぼる答案を短期間に採点、処理しなければならない関係上、いきおいコンピュータ処理によらざるを得ないことから、問題形式も選択解答方式が採用されているわけで、このことが又、種々論議を呼ぶところでもある。

こうした全国一斉テストが実施されるようになってから、各大学間の序列化が一層明確になり、その結果受験生は入学したい大学よりも入学できる大学を選んで受験するようになったと考えることができる。このような状況のもとに

入学してくる学生は、当然のことながら共通 1 次試験実施以前の入学者に比して目的意識を持った学生が少なく、全般的に資質が低いのは当然のなりゆきであろう。本学でも例外でなく、目的意識を持って入学してくる学生が減少し、根性のある学生が少なくなったと嘆く人が多い。本学の農学部の場合は、その前身が第三高農と云われた鳥取高等農業学校であったという地方大学の中では伝統のある学部であるため、県内はもとより、遠く県外からも本学部でなければと強い目的意識を持って入学してくる優秀な学生が毎年居ることは居るが、以前に比べると問題にならないほど少なくなっている。従って目的意識を持った学生を 1 人でも多く合格させたいと思うのは誰しも同じである。しかも実業高校出身者は、共通 1 次試験では普通高校出身者にたち打ち出来ないのも、試験入学制による入学者は皆無に近い状況にある。この実業高校の優秀な学生を、そして目的意識を持った根性のある学生を試験入学制とは別法で入学させようとして、推薦入学制を実施する学科が徐々にではあるがふえていったのである。

ところが、農学科と農業経営学科の 2 学科は、I 期校、II 期校に分かれて大学入試が行われていた時代から既に推薦入学制を実施してきた経験を持っている。したがって、共通 1 次試験実施以前のいわゆる旧 I 期校、II 期校時代の 10 年間と、共通 1 次試験実施以後の 8 年間における推薦入学とに分けて検討することとする。

そもそも前述の2学科が推薦入学制の実施に踏み切ったのは、昭和44年のことであるから、丁度18年の歴史をもっていることになる。当時も実業高校から試験入学制で大学に進学するには、可なり本人の努力が必要であったことは、今と変りないが、普通高校に比して語学と数学の授業時間数の極めて少ないハンディを自己の努力で克服して、堂々と試験入学制で進学してくる学生が居た。ところが、共通1次試験制度が実施されてからは、そのような学生は居なくなった。以前も今も、実業高校から国公立大学への進学は至難のわざであることに変りはなかった。しかも、旧制の農林学校から農専、大学へ進学した学生には優秀な人材が多かったことも事実なので、実業高校の成績優秀な学生に大学進学の道を開こうというのが推薦入学制実施の理由であった。その後、対象を普通高校へと広げていくこととなった。表-1は、共通1次試験が実施されるまでの10年間に於ける農学科と農業経営学科の推薦入学実施状況を示したものである。この10年間に於ける推薦入学に関する本学の入学者選抜方法研究委員会による調査研究は、主として推薦入学者の入学後に於ける学業成績の実績を追跡調査することにより、当該学生が推薦選抜者としてふさわしい者であったかどうかを検討しようとするものであった。その調査結果によれば、推薦入学者は、平均的

にはほぼ中位以上の学業成績をあげており、その意味からすると、今まで行ってきた推薦選抜は、結果としてはほぼ妥当なものであったとみることができる。しかしながら、推薦入学者の学業成績は、非常にバラツキが大きく、毎年推薦にふさわしくない低い成績点しかあげ得ない学生も出ており、必ずしも従来とってきた推薦選抜のあり方が妥当であったとは云えない。むしろ、こうした悪い成績をとる推薦入学者が後を断たないことから、推薦選抜の妥当性については、どちらとも断言できないと云うのが実状である。もちろん、学業成績は、大きな判断の指標ではあるけれども、それだけでもって推薦入学者が、推薦にふさわしい人物であったかどうかを判定することは容易ではないので、従来から行ってきた学業成績の調査に加えて、昭和53年度には、関係教官による人物評価の調査を行い、推薦入学者の入学後の総合評価を試みたのである。ここで試みた人物評価の方法は、関係教官が推薦入学者に対して、どのような評価を与えているかを調べて、推薦入学者の資質面と行動面の人物的水準をさぐり、その位置付けをしようとした。すなわち、人物を資質面と行動面から考察することとし、それぞれについての評価要素を選定し、その各要素を5段階で評価することにしたのである。その評価要素と評価表の様式を表-2に示す。

表-1 共通1次試験実施以前における推薦入学状況調

年度 学科	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
農 学 科	4 86(5)	5(1) 80(3)	4(1) 58(5)	5(1) 45(7)	3 38(3)	5(1) 41(8)	5(2) 39(7)	4(1) 37(4)	5(1) 48(5)	5 41(4)
農業経営学科	6(1) 38(2)	6 46(1)	9(3) 93(5)	7(2) 55(6)	9(4) 61(5)	10(5) 63(7)	9(5) 72(10)	10(1) 63(4)	10(3) 64(4)	8(2) 60(4)
計	10(1) 124(7)	11(1) 126(4)	13(4) 151(10)	12(3) 100(13)	12(3) 99(8)	15(6) 104(15)	14(7) 111(17)	14(2) 100(8)	15(4) 112(9)	13(2) 101(8)

(注) 上段は合格者、下段は志願者、()内は女子を内数で示す。

表-2 推薦入学者人物評価表(様式)

氏名		○ ○ ○ ○ ○				
評価要素	評価	5	4	3	2	1
資質面	理解・判断力					
	書字・筆記力					
	計数・計算力					
	言語・会話力					
行動面	指導性					
	協調性					
	研究性					
	責任感					
総合評価	創造性					
	持続性					

具体的な評価は、当該学生の学級教官に、この評価表を渡して行ったのであるが、学級教官で判別し難いときには、学科内の関係教官で合議して決めてもらうこととした。また評点は、クラス全体では正規分布するものとし、評価はその分布での位置付けを想定するものとして、出来るだけ客観的相対評価をすることに努めた。

このようにして人物評価したものを、学科別各評価要素毎に集計して、表-3に示すような一覧表にまとめた。

表-3 評価要素別人物評点分布

評点		(農学科)					平均	標準偏差
評価要素	5	4	3	2	1			
資質面	理解・判断力							
	書字・筆記力							
	計数・計算力							
	言語・会話力							
行動面	指導性							
	協調性							
	研究性							
	責任感							
総合評価	創造性							
	持続性							

これらの集計結果から、次のようなことが明らかになった。

まず、学科別にみた場合、農学科と農業経営学科の評価の仕方に若干の偏りのあることが想像されたので、直接両学科の結果を比較することは出来ないが、各学科内での評価要素別評点分布の比較は可能であると考えた。すなわち、評価要素別評点分布を比較すると、資質的側面として取り上げた評価要素では、両学科共あまり特徴や傾向はみられないが、行動面として取り上げた評価要素には、若干の特徴が認められた。すなわち推薦入学者は、両学科とも全体として指導性、創造性が低いことがわかった。このことは推薦入学者には、与えられたことをこつこつ努力するタイプの人はいけれども、自主的に行動し、かつ人を指導していくタイプの人が少ないことを想像させるものである。そして今までの推薦入学者には、傑出した人物もいない代わりに、常軌を逸するような人物もいないというのが総体的な見方である。なおこの人物評価の面からみても、推薦にふさわしくない学生が極く少数存在する。こうした学生を推薦してきた高校側の姿勢が、改めて問われなければならない。次に出身高校別にみると、実業高校出身の方が普通高校出身者よりも、総合的にみて人物評点が若干低い。また評価要素別にみても、理解・判断力や創造性において普通高校出身者より実業高校出身の方が、総体的に低い評価となっている。人物評点と学業成績の相関は、教養科目で低く、専門科目で高い。しかし実業高校出身者は、教養科目全般にわたり人物評価とは相関がなく、専門科目についても相関が低い。最後に留年状況であるが、推薦入学者でも、試験入学者と同じような比率で教養課程での留年者が出ている。これまでの全平均

表-4 共通1次試験実施以降における推薦入学状況調

年度		54	55	56	57	58	59	60	61
学部・学科									
工学部	機械系学科	—	—	—	—	—	$\frac{10}{12}$	$\frac{5}{16}$	$\frac{7}{14}$
	工業化学科	—	—	—	—	—	$\frac{2}{2}$	$\frac{4}{7}$	$\frac{5}{9}$
	土木工学科	—	—	—	—	—	$\frac{3}{3}$	$\frac{4}{8}$	$\frac{3}{5}$
	資源循環化学科	—	—	—	—	—	$\frac{2}{4}$	$\frac{3}{6}$	$\frac{3}{5}$
	海洋土木工学科	—	—	—	—	—	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{3}$
	計	—	—	—	—	—	$\frac{18}{24}$	$\frac{17}{40}$	$\frac{19}{36}$
農学部	農学科	$\frac{1}{2}$	$\frac{8(1)}{12(2)}$	$\frac{8(1)}{10(1)}$	$\frac{8(3)}{14(5)}$	$\frac{8}{22}$	$\frac{8}{21(2)}$	$\frac{7}{46(5)}$	$\frac{7(2)}{19(5)}$
	林学科	$\frac{3}{3}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{2}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{4}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{8}{20(1)}$
	農業工学科	—	—	—	—	—	—	$\frac{6}{12}$	$\frac{8}{15}$
	農業経営学科	$\frac{7(1)}{16(1)}$	$\frac{9(3)}{16(5)}$	$\frac{4}{6}$	$\frac{9(2)}{21(5)}$	$\frac{10(1)}{21(3)}$	$\frac{10(3)}{20(5)}$	$\frac{8(2)}{10(4)}$	$\frac{10(2)}{19(2)}$
	計	$\frac{11(1)}{21(1)}$	$\frac{18(4)}{29(7)}$	$\frac{14(1)}{18(1)}$	$\frac{18(5)}{37(10)}$	$\frac{19(1)}{44(3)}$	$\frac{21(3)}{45(7)}$	$\frac{22(2)}{70(9)}$	$\frac{33(4)}{73(8)}$
合計		$\frac{11(1)}{21(1)}$	$\frac{18(4)}{29(7)}$	$\frac{14(1)}{18(1)}$	$\frac{18(5)}{37(10)}$	$\frac{19(1)}{44(3)}$	$\frac{39(3)}{69(7)}$	$\frac{39(2)}{110(9)}$	$\frac{52(4)}{109(8)}$

(注) 上段は合格者、下段は志願者、()内は女子内数で示す。

留年者率は、普通高校出身者が10%、実業高校出身者で約30%にも達する。推薦にふさわしい学生ならば、当然留年しないように努力することが想定されるので、この留年者率は推薦不適格率におきかえて考えることができる。

さて、昭和54年より共通1次試験が実施されることとなり、従来実施してきた推薦入学制度は1つの転機を迎えることになった。表-4は共通1次試験が始まった昭和54年以降の推薦入学実施状況を示したものである。表が示す通り、農学部では、昭和54年度から林学科が、昭和60年度から農業工学科が実施に踏みきり、工学部でも昭和59年度より、機械系学科、工業化学科、土木工学科、資源循環化学科、海洋土木工学科で実施されることになった。募集人員は、工学部が、各学科入学定員の1割、農学

部は、農学科、林学科、農業工学科が入学定員の2割以内、農業経営学科が入学定員の3割以内となっている。1次選考は、共通第1次試験の成績、調査書、健康診断書及び推薦書による書類審査で、2次選考は、1次選考に合格した者に対して行われる。この場合、工学部及び農学部農業経営学科は面接を、農学部農学科、林学科及び農業工学科は面接と小論文を課している。両学部のどの学科も、対象となる学校の範囲を、高等学校の普通教育を主とする学科及び専門教育を主とする学科としている。面接と小論文を課している農学部の3学科における具体的な実施方法は次の通りである。農学科では、各講座毎に小論文のテーマを封筒に入れて提出し、主任が当日、その中から1つ選ぶ。採点は全教授、面接は全教官で行い、面接と小論文は

同じウエイトで採点する。林学科では、全教授で小論文のテーマを2題程度準備し、当日、主任が選ぶ。採点は全教授で行う。面接は全教授で行う。農業工学科では、小論文出題採点委員を教授及び助教授の中から3名選出し、出題・採点に当たる。面接は全教授で行い、小論文の順位点と面接の順位点から総合順位をつけて判定している。農業経営学科では、当初、作文を課していたが、共通1次試験実施と同時に廃止し、面接のみとした。作文を廃止した理由は、採点のバラツキが大きいことと、共通1次試験の成績があるので不用であるとの2点である。面接は、全教官で行っている。

共通1次試験実施以後の推薦入学者の一般的動向、共通1次試験に基づく推薦入学者と2次試験入学者の相関、そして推薦入学者に対する入学後の成績について、検討した結果を要約すれば次のとおりである。

- (1) 農学部3学科（農業工学科は実施後、日が浅いため、除外）では、ほぼ半数に近い県外出身者の入学が認められるが、工学部の割合は半数以上で、中退者数、休学者数は少なく、定着率は非常に高い。
- (2) 農学科と農業経営学科では、全般的に共通1次試験の高得点者と低得点者の得点差が大きく、成績に偏重しない選抜方法を意

図しているものとうかがえる。林学科では、低得点者を積極的に受け入れる姿勢をとっているように見受けられる。工学部では各学科とも、合格判定規準に共通1次試験の成績が占めるウエイトが高いと思える。

- (3) 教養課程の成績は、共通1次試験の得点と強い相関を示す場合が多い。しかし最近の学生気質によるためか、推薦入学者においても期待に反して低い評点が目立つ。工学部では、単位取得状況は順調であるものの、評点は良好とは云えない。農学部では、専門課程の採点は概ね良好である。

昭和61年度までのデータによる調査研究は、目下、資料整理を実施中であるため、以上の要約は、昭和60年度までの資料に基づくものであることをおことわりしたい。

なお、昭和62年度の本学学生募集要項（昭和61年11月26日発表）の推薦入学制実施要項によれば、昭和62年度より、医学部でも推薦入学を実施することになり、募集人員は約20人となっているほか、工学部でも新たに電子工学科が加わって、募集人員も各学科10人以内と枠が広がっている。医学部も小論文は課さないことになっている。こうして、本学の推薦入学制度は記述のような問題点をかかえながら、徐々に拡大の傾向をたどっている。